めぐみイエス・キリスト教会

2025年12月7日（日）第一主日（第Ⅱアドベント）礼拝
午前10時より
週報「通算第787号」

2025年標題聖句

イザヤ書40章30節～31節

《若者も疲れて力尽き、若い男たちも、つまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れない。》

第一礼拝（教会にて）　毎週日曜日　午前10時～11時
聖書の学びと祈り会　毎週水曜日　午後6時～（各家庭にて）

牧師　鈴　木　竜　実
　　ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人（ものみの塔）、統一教会（原理福音）とは、一切関わりがありません。

◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】
【賛　美　Ⅰ】新聖歌80「天なる神には」　p. 110
【交　読　文】№1　詩篇第1篇　p. 879
【賛　美　Ⅱ】新聖歌77「きよしこの夜」　p. 105
【使徒信条】
【主の祈り】
【前回説教】
【賛　美　Ⅲ】オリジナル曲「天より来られし」
【聖書朗読】ルカの福音書11章45節～54節（p. 140上段）
【礼拝説教】《災いとならない為に》
【聖　餐　式】
【賛　美　Ⅳ】新聖歌166「威光・尊厳・栄誉」　p. 236
【平和祈り】
【頌　　栄】新聖歌63「父・御子・御霊の」　p. 85
【祝祷後奏】

※本日の聖書箇所ルカの福音書11章45節～54節

11:45　すると、律法の専門家の一人がイエスに言った。「先生。そのようなことを言われるなら、私たちまで侮辱することになります。」
11:46　しかし、イエスは言われた。「おまえたちもわざわいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本触れようとはしない。
11:47　わざわいだ。おまえたちは預言者たちの墓を建てているが、彼らを殺したのは、おまえたちの先祖だ。
11:48　こうして、おまえたちは先祖がしたことの証人となり、同意しているのだ。彼らが預言者たちを殺し、おまえたちが墓を建てているのだから。

11:49 だから、神の知恵もこう言ったのだ。『私は預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者たちを殺し、ある者たちを迫害する。
11:50 それは、世界の基が据えられたときから流されてきた、すべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。
11:51 アベルの血から、祭壇と神の家の間で殺されたザカリヤの血に至るまで。』そうだ。私はおまえたちに言う。この時代はその責任を問われる。
11:52 わざわいだ、律法の専門家たち。おまえたちは知識の鍵を取り上げて、自分は入らず、入ろうとする人々を妨げたのだ。」
11:53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者たち、パリサイ人たちはイエスに対して激しい敵意を抱き、多くのことについてしつこく質問攻めを始めた。
11:54 彼らは、イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと狙っていたのである。

●ポイント1.「人々に負い切れない荷物」とは？
※マタイの福音書11章28節～30節「主イエスの言葉」(新約p.21下段)

●ポイント2.「祭司ザカリヤ(ギリシャ語)の死」とは？
※第Ⅱ歴代誌24章20節～22節「ゼカリヤ(ヘブル語)」　(旧約p.791)
24:20 神の霊が祭司エホヤダの子ゼカリヤをおおった。彼は民よりも高いところに立って、彼らに言った。「神はこう仰せられる。『あなたがたは、なぜ【主】の命令を破り、繁栄を逃がすのか。』あなたがたが【主】を捨てたので、主もあなたがたを捨てられた。」
24:21 ところが、彼らは彼に対して陰謀を企て、王の命令によって、【主】の宮の庭で彼を石で打ち殺した。
24:22 ヨアシュ王は、ゼカリヤの父エホヤダが自分に尽くしてくれた誠意を心に留めず、かえってその子を殺した。ゼカリヤは死ぬとき、「【主】がご覧になって、責任を問われますように」と言った。

◎先週のメッセージ【偽善者とならない為に】

《「わざわいだ、パリサイ人。おまえたちはミント、うん香、あらゆる野菜の十分の一を納めているが、正義と神への愛をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならないことだ。」主イエスは、ここで十分の一献金のことを言われました。十分の一について、最も言及されたのは旧約最後のマラキ書です。『十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、私の家の食物とせよ。こうして私を試してみよ。私があなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。』と。

十分の一献金は、教会と会員ではなく、神様とその人との個人的問題です。これは私の見解ですが、十分の一献金を捧げなくても、神様の祝福はあります。しかし、捧げた方が神様の祝福がはるかに大きいと思います。また、神様への献金は、いやいやではなく、喜んでするものであり、その金額も各々が自分で決めることなのです。

当時の十分の一とは、穀物(麦・大麦)と家畜の十分の一のことでした。ところが、パリサイ人は、それ以上に十分の一を捧げていたのです。しかし、その動機は人々に多額の献金をしたことを見せびらかすためでした。それゆえ、主イエスは彼らを偽善者と言われたのです。

パリサイ人は、当時、立派な人として、人々から尊敬されていました。彼らは、十分の一献金も実行していましたし、よく伝道もしていました。よく祈りましたし、また一週のうち二度も断食していたのです。

彼らは品行方正でもあり、まさに信仰生活における優等生であったのです。しかし、心の中を見る主イエスは、彼らが偽善者であることを見抜いていました。彼らは、人々から賞賛されることや尊敬されることを求めていたのです。偽善は、高慢の次に主が嫌うものです。私たちも偽善者にならぬよう、聖霊と共に日々歩んで行きたいものです。》

◎お知らせ

※次回の第二主日(第Ⅲアドベント)礼拝は12月14日午前10時からです。2026年1月4日の第一主日礼拝はお休みします。ご注意下さい。